

# 〈ケア〉と文学

上智大学外国語学部英語学科教授

小川公代

おかわ きみや



ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)という英国人作家がいる。彼女の作品はこれまで一般読者にそれほど読まれてこなかったのだが、ここ数年、日本で注目を集めるようになった。『幕間』『フラッシュ―ある犬の伝記』『波』といった小説だけでなく、エッセイ『病むことについて』の新装版などの翻訳も続々と刊行されている。それは、格差社会が生み出す生きづらさに加えて、おそらくコロナ禍という緊急事態に見舞われ、〈ケア〉が生死を握る力を持つようになったからだろう。ウルフは、様々な作品に子供や弱者をケアする人を登場させている。「意識の流れ」という特有の語り手法によって、読者をこのケアラー達の内面世界へといざなう。

今の日本社会でも、医療関係者、介護職の従事者配送業者など「エッセンシャルワーカー」と呼ばれる人々が、コロナ禍にさらされる命を守り、健康の維持に大きな貢献を成している。それは家庭においても同じで、ケアラー達が家族の命を支えている。例えば、全国で学校の一斉休校宣言がなされたとき、とりわけシングルマザーの家事や育児の過酷さが可視化された。在宅勤務が難しい職種で退職を余儀なくされたうえに、仕事に復帰しようと職探しを再開しても、子育て中のひとり親という立場が敬遠されて難航する女性の苦しみが新聞でも報道されていた。ウルフの小説『灯台へ』に登場するケアラーのラムジー夫人はシングルマザーではないが、彼女は常

に子ども達の要求に耳を傾け、夫の世話に奔走する。8人の子どもを生み育て、友人達、さらには社会の隅々にまで思いを馳せるケア精神に満ちた人物である。「この世には理性も、秩序も、正義もなく、苦しみと、死と、貧者があるのみ」という言葉は彼女の性質を最もよく表している。

誰もが1度は見聞きしたことのあるL・M・モンゴメリによる『赤毛のアン』も、カナダの小さな村を舞台にしたケアに奮闘する少女の物語である。かつてハモンド家で3組もの双子のベビーシッターをしていた、根っからのケアラーのアンが触媒になり、彼女を養女にしたカスバート老兄妹をケアラーに変えていく。この2人は、孤児を庇護したいと考えてアンを引き取ったわけではなかった。労働力のために男の子を引き取るつもりだったため、妹のマリラは一度はアンを拒絶する。しかし兄のマシューの方はアンのケア精神にすっかり感化され、彼女を労働者としてではなく家族として迎え入れることを提案

するのだ。

孤児だったアンの暗い過去に「ヤングケアラー」というラベルをあてがいが、ケア自体否定してしまうことは容易だろうが、この小説では、ケアは生死を分ける尊い営為として描かれる。あるとき、親友のダイアナ・バリーの3歳の妹ミニー・メイが両親の留守中にクループ(咽頭炎)にかかって重症化してしまふ。途方にくれたダイアナがアンを頼みの綱とし、アンは期待通り、手慣れた様子でできばきと看護した。そのおかげでミニー・メイの命を救うことができたのだ。アンは自分の過去の暗部をポジティブなエネルギーに変えていた。アンのケア精神に最も感化されるのが、ケアに不慣れであった男性のマシューである。結婚したこともなく、育児経験が皆無だった彼が、アンの養育に関心を持ち、自発的に関わっていくプロセスは、読んでいて心動かされる。

エヴァ・フェダー・キティは『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』(岡野八代、牟田和恵監訳)で、育児について「この最も古く最も普遍的な女性労働の価値がおとめられているのはおかしい」という。コロナ禍における緊急事態によって、看護職や介護職、或いは家事や育児といった〈ケア〉がいかにかけがえないものであるか、或いはいかに高い技術を要求されるのかという認識が少しずつ社会に広まりつつある。ウルフ人気は、その証左であるのかも知れない。

## 時の調べ Essay

略歴  
ケンブリッジ大学政治社会学部卒業。グラスゴー大学博士課程修了(PhD)。専門は、ロマン主義文学、および医学史。著書に、「文学とアダプテーション——ヨーロッパの文化的変容」(共編著、春風社)、「ジェイン・オースティン研究の今」(共著、彩流社)、「ジョージ・オーウェル「一九八四年」を読む」(共著、水声社など。訳書に「エアスイミング」(シャーロット・ジョーンズ著、幻戯書房)、「肥満男子の身体表象」(共訳、サンダー・L・ギルマン著、法政大学出版局)などがある。「群像」や「毎日新聞」(文芸時評など)への寄稿も多数。

『ケアの倫理とエンパワメント』  
四六判 / 226ページ好評発売中  
講談社ウェブサイト  
<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000354535>

